

極地におけるエコツーリズムの実践

Current Ecotourism Model in Shizuoka's Local Areas

藤森 憲臣^{*1,*2,*4} 若杉 和男^{*2} 藤井 直紀^{*2,*3} 内藤 将志^{*4}

FUJIMORI Noriomi^{*1,*2,*4}, WAKASUGI Kazuo^{*2}, FUJII Naoki^{*2,*3}, NAITO Masashi^{*4}

*1)星城大学, *2)富士山極地の螢探検隊, *3)常葉大学富士環境防災研究所, *4)名古屋大学

I. はじめに

近年、健康増進ためのウォーキングやトレッキングのような自発的に身体を動かす趣味、趣向が流行を見せている。観光産業でも全国各地の企業及び公共団体、個人だけでは無く関係役所まで「山歩き」をコンテンツとした旅行企画を提案し、提供または販売を行っている。また、「レベル別の山歩き(①ウォーキング→②ハイキング→③トレッキング→④クライミング)」を売りにした旅行企画は、現在及び今後もさらに増加する一方である。

これまでにも様々な団体企画のマイナープランにも度々参加してきた。メジャープランとマイナープランを比較してみると、マイナーは小さな単位であることで「時、場所、物・事、+人(自・他共)」の「+α」コンテンツを直接的に実感出来る大きな魅力がある。

本調査では、静岡県管轄の極地「富士山(富士市及び富士宮市)」をフィールドに実践しているエコツーリズム(主目的はホタル観察)の実践について記述する。

II. 極地エコツーリズム(パイロット版)の概要

2015年7月から8月に静岡県の富士市及び富士宮市にて実施した極地エコツーリズム(パイロット版)を報告し、観光学の知見からその内容を紹介する。本ツアーは、2013年から毎年1回から2回開催し、今回で3年目の実施となる。

今回の企画は「富士山・極地の螢探検隊」が主催し、ツアーガイドも選出した。ガイドは、全国各地でホタルの調査研究を行い、大学講師及びエコツアーの企画運営や人材育成に取り組む人材である。

主な企画は、深夜に群れ飛翔発光し平地から2000mの高山帯に分布するヒメボタル観察であった。また、日程や滞在場所的に宿泊を余儀無くされる企画の関係上、他と比較すると特別なコンテンツとして早朝からの林内散策(主に、昼行性のホタル観察)が行われた。

ツアーパートナー及び日程は、次の通りである。

【ツアーパートナー(10名)】

- ・ F氏…名古屋大学大学院生命農学研究科

相模女子大学及び名古屋産業大学、星城大学の非常勤講師。浜松市天竜区の水窪タクシー観光部に所属し、「エコツーリズム」を積極的、実践的に展開。
富士山・極地の螢探検隊・隊員で本ツアーハーの企画・立案及び運営、ガイド。

- ・ W氏…造園業 その他、伊勢・三河湾離島の螢探検隊・隊員

- ・ F氏…富士常葉大学付属環境防災研究所・研究員

その他、富士山・極地の螢探検隊・隊員

- ・ N 氏…名古屋大学大学院生命農学研究科
　　その他、日本自然保護協会(NACS-J)・自然観察指導員
- ・ O 氏：おぢやのじかん・代表
- ・ T 氏：一般参加
- ・ K 氏：一般参加
- ・ O さん、N さん(2名)：学生参加

【ツアーワンデ】

2015年①7月24日（金）及び②7月31日（金）

- 18:00 集合、その後名古屋出発
 - 22:00 富士山到着(PICA 表富士キャンプ場)
 - 22:30 ガイドによるホタル観察のレクチャー
 - 23:00 西臼塚・富士宮スカイライン 1200m 地点での夜行性ホタルの観察
 - 25:00 観察終了、その後就寝
-

2015年①7月25日（土）及び②8月1日（土）

- 07:00 ガイド(サブガイド)による事前調査
- 08:00 西臼塚・富士宮スカイライン 1200m 地点での昼行性ホタルの観察
- 12:00 観察終了、その後ディスカッションと昼食(軽食)
- 13:00 富士山出発(西臼塚駐車場)→経由地：奇石博物館(希望者がある場合)
- 17:30 名古屋到着、その後解散

III. 極地(富士山)及び関係施設について

静岡県(富士宮市及び裾野市、富士市、御殿場市、小山町(駿東郡))及び山梨県(富士吉田市及び鳴沢村(南都留郡))に跨る活火山で、標高は 3776m の日本最高峰(剣ヶ峰)である。日本三名山(三霊山)、日本百名山、日本の地質百選に選定されている。

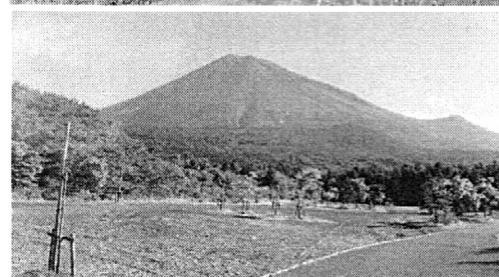
優美な風貌は、国内及び海外でも日本の象徴として広く知られる。懸垂曲線の山容を有した玄武岩質成層火山で構成され、その山体は駿河湾の海岸まで及ぶ。富士山麓周辺には多くの観光名所の他、夏季には富士登山が盛んである。

1936 年(昭和 11 年)に富士箱根伊豆国立公園に指定された。その後、1952 年(昭和 27 年)に特別名勝、2011 年(平成 23 年)に史跡、さらに 2013 年(平成 25 年)6 月 22 日に「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録された。

(1) 西臼塚、西臼塚駐車場

富士宮市、富士市の市境域に位置し、その標高は約 1200m 地点である。

マイカー規制時に水ヶ塚公園駐車場が満車になった場合、その予備駐車場として利用される。場内は舗装されず、砂利が敷かれている。設備は、あずまや及びトイレ等の設備がある。



標高 1293mの頂上に噴火口を持つ小山（寄生火山）である。植生はナラ、カエデ、モミなどをはじめとする針広混交林が広がっており、林内は遊歩道が整備されている。

(2)PICA 表富士キャンプ場

富士宮市に位置し、その標高は約 1100m 地点である。

株式会社フジヤマ・クオリティの運営する野外宿泊施設で、テントサイト以外にもコテージ、キャビンなどがある。シャワー室などの設備もある。その他、寝具はもちろん、各種アウトドア用品の貸し出しも行っている。

(3)一般財団法人奇石博物館(私設)

富士宮市(富士宮スカイラインに隣接)に位置し、その標高は約 800m 地点である。

世界中の鉱物・化石及び石にまつわる文化を扱った博物館で、1 時間から 2 時間もあれば全展示物を見て回れる規模である。

「奇石」をキーワードとして好奇心をそぞるような様々な工夫が凝らされており、ジャンルごと・テーマごとに整理されている。その時々で観察会・体験教室・企画展が開催されており、リピーターを呼び込む工夫がなされている。

収蔵品も膨大な数にのぼり、常設展示約 1800 点に加え一度に展示しきれないために毎月の企画展で入れ替え展示を行っている。

極地におけるエコツーリズムを実施する観光地として「①森(自然)に囲まれていること、②宿泊施設(温浴関連含む)、③環境学習施設があること」が適している。

優占樹種はモミ、その他ブナ、ナラ、シラカバ等にて自然林が構成され、現在では国内でも数少ない天然林である。一般的に見知りされたスギ、ヒノキの人工林は標高約 1000mまで生育分布するが約 1200m 地点の針葉樹はモミノキに遷移し、人間の手が強く加えられないまま枯損木または倒木が苔生している昼間の森の様相はジブリアニメの世界観を彷彿とする。



宿泊施設(キャンプ場、コテージ)も充実しており、夜間の安全確保もされる。標高約 1000m 地点には温浴施設(富士山天母の湯)、また同地点に近接して一般に人気の高い環境学習施設(奇石博物館)の立地もあり、コンテンツが充実して過ごしやすい環境である。

IV. 観光対象及び行為

(1) ホタル観察(夜間)

今回、夜間のホタル観察で対象としたヒメボタルは東北(青森)から九州(鹿児島)まで広く分布する。平地から高山地まで広く分布し、生育環境も雑木林及び竹林、河川敷など多様である。



<現地での観察>

本来ならば暗くなつてから訪れるホタル観察地

点を、参加者には事前(日没前の明るい時間)に歩いて物理場の状況把握を行ってもらう。しかし、本ツアーワでは遠方(名古屋)からスタートし、移動に4時間程度の時間がかかるため割愛することになる。この場合、現地を十分に知るガイドの案内に従ってもらう必要がある。

22時過ぎ、ガイドから参加者に対しスライドを用いて約30分のホタル解説を行った。その後、車輛に分乗して観察地点へ移動する。

到着すると小型の懐中電灯を手渡される。足元が見えず不安な時は足元を時折照らしながら安全確保して、それ以外はホタルの発光を邪魔しないよう消灯状態で進むほうが良い。ガイドを先頭にペアになった参加者2名ごとに手をつなぎ、林道順路を進むと周辺で点滅する飛翔発光を見つけ始めた。当初、一部の参加者のみに見えていたホタルが歩みを進めると連れて「あちらに見えた！こちらに見えた！」の声が聞かれるようになり、多くのホタルが群れで観察できる場所も見つかり始めた。

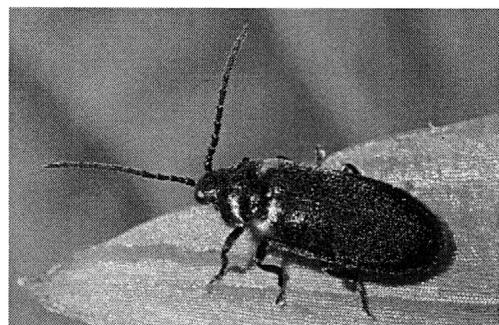
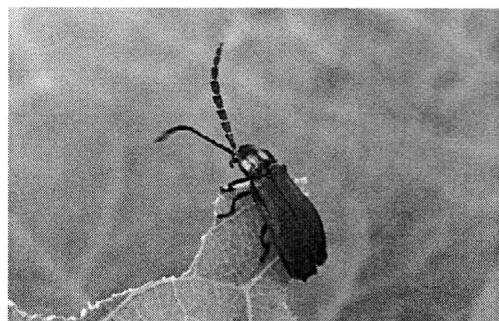
駐車場では薄暗い夜空で暗闇を見せる森の中、観察路及び木々の形、参加者のシルエットすら見えない中、声のみを頼りにしたコミュニケーションを行う非日常を体験することができる。ここでも「不安の中で湧き上がる興奮のようなものを感じた！」と参加者より声があった。

無数のホタルの光の中からヒメボタルとは異なる発光を見つけ、また立ち止まる。各人、地面で光るその点を見つけ、手にしてみるとマドボタル幼虫である。これをサンプル管に入れたり、参加者の手に乗せるなどして姿及び形、発光を観察した。乱舞という「飛翔ピーク」の状況では無いものの、視界に数え切れない程のホタルが飛び回る幻想的な風景を森の中に見ることができた。

ホタルを夢中に観察すること約3時間、25時に目視及び捕獲しての観察が終了した。

(2)ホタル観察(昼間)

今回、昼間のホタル観察で対象としたクロマドボタル及びオバボタル、オオオバボタル、カタモンミナミボタルは東北(青森)から九州(鹿児島)まで広く分布する。ただし列挙した種の「クロマドボタル」のみは、西日本側に移動するにつれ同属のオオマドボタルに変移し、四国及び九州地域の多くではオオマドボタルが分布している。平地から高山地まで広く分布しており、生育環境も雑木林及び竹林、河川敷など多様である。



<現地での観察>

ガイドは夜明けの7時から踏査、参加者には8時からホタル観察林道を歩きながら観察してもらうことで物理場の状況把握もしてもらうよう現地案内をする。

8時過ぎ、ガイドから参加者に対し口頭で約15分のホタル解説を行った。その後、車輛に分乗して観察地点へ移動する。

捕虫網及びサンプル管を各人に手渡す。林道順路を進むとその周辺で参加者が昆虫類の飛翔を見つけ始めた。当初、一部の参加者のみに見えていたホタルの姿を歩み進めるに連れて「あちらに見えた！こちらに見えた！」の声が聞かれるようになり、多くの昼行性ホタル科昆虫が観察できる場所も見つかり始めた。

大人になってから捕虫網を持ち、虫捕りをする機会は少ない。「単なる虫捕りだが、幼少期の気持ちに戻り楽しむ好奇心の充実がある！」と参加者より声があった。



飛翔するホタルの姿を見つけ、また立ち止まり捕虫する。各人、これをサンプル管に入れたり、参加者の手に乗せる等で姿及び形を観察した。乱舞という「飛翔ピーク」の状況では無いものの、視界にいくらかのホタルが飛び回る幻想的な風景を自然林の森の中に見ることができた。

ホタルを夢中に観察すること約4時間、12時に目視及び捕獲しての観察が終了した。

<運営上注意すべき事項>

- ・現地に詳しいガイドまたはコーディネータを準備する。
- ・野外活動保険への登録をする。
- ・救急搬送及び参加者の緊急連絡先(保護者等)を事前確認する。
- ・危険物及び危険生物に対する注意喚起を行う。
- ・夜間観察の場合、観察地点(林内)の明るさがお互いを確認できない程度に暗条件下に置かれる場合が発生する。特に、富士山林内では遭難の恐れを考慮しバディの設定及び逐次声掛け等をすることで常に相互確認を行う。

V. 結論

今回実践した「ツーリズム」の概念を重視したエコツアーホタル観察(夜間及び昼間)の2つのコンテンツを準備して提供し、好評を得た。

本企画が一般にも有効であることが証明されたと共に、短期的な旅程の中で参加者の満足度向上のためにはガイドがプロフェッショナルである重要性が再確認された。

VII. 引用文献

- 1) 森田武志、高松一史、藤森憲臣、観光のオーセンティシティについての理論的枠組みの考察、名古屋産業大学(環境情報ビジネス学会)論集26号、25-38、2015